

〔童話〕

おや、おや、おや、  
話はなし

高 島 巖

夏がだんだん近づいて、眞白な入道雲が、ちよくちよくお顔を出す頃になりました。

正雄君が、朝早く起きて、お庭の隅つこに咲いてゐる朝顔に水をやつてゐますよ、お父さんが、お呼びになりました。

「ちよッ、ちよッ、ちよッ、正雄や」

「はい、お父さん。お早ようございませす」

「ああ、お早よう。今日は随分早起きだね。なにかあるのかい？」

「いいえ、なんにもないんですが、僕、今日、朝顔あなご早起きの競争をしたんです」

「えッ、朝顔あなご早起きの競争？」

「ええ、こころが、負けちやつたんです」

「なに？ 負けた？」

「ええ、朝顔あなごつて随分早く目を覚ますもんですね。僕、今日五時に起きたんですが、大急ぎでここへ来て見るよ、もうちやあんま目を覺まして、にこにこ笑つてゐるんですよ。そして、僕に、水を飲ませて呉れつて云ふんです」

「さうか。お前もなかなか面白い事を考へつく子供だね。こころでね、今日はひみつ、いい話があるんだが、さうだい、今日、お父さんちちと一緒に、お魚を釣りに行かないかい？」

「お魚を釣りにですか」

「さうだ。そしてひみつ、今晚は、お父さんちちとお前まへで釣つたお魚で、お母さんやおぢいさんおばあさんを、よろこばせてあげよう」

「うむ、それはいい考へだ。僕、直ぐお支度をして來ます」  
「朝ごはんのお仕度が出來てゐるか。聞いて來て下さいよ」

\*

正雄君は、大急ぎで、お家のなかへかけ込みました。

「お母さん、お母さん、お母さん」

「なんです、朝からそんな大きな聲を出して」

「ううん、あのね、連れてつていただくの」

「連れてつていただくつて、何處へ、あなたに？」

「お父さんに、そしてね……あのう、あのう……お母

さん、お母さん、お母さん、今晚は、おかげを買はないで下

ちやうど」

「どうして？」

「お魚を釣りに行くの」

「まあ、家中で食べるお魚を、お父さんにお前まで釣つ

て來るつて云ふの？」

「うむ、さう」

\*

正雄君は、お支度をして、おそこへ出て來ました。

「お父さん、お父さん、お父さん」

「なんだい、大きな聲を出して、もう朝ごはんのお支度、出來たかい？」

「ああ、さうか。聞いて來なかつた。でも、出來てゐれば、たしかに出來てゐるでせう」

「あたりまへぢやないか、出來てゐれば出來てゐるのは、もう一ベン聞いて來なさい」

正雄君は、もう、うれしくてうれしくて夢中です。

朝ごはんが済むと、早速、正雄君は、釣道具をもつて、

お父さんと一緒にお家を出ました。

\*

正雄君たちのやつて來ましたところは、ある大きな川の  
ふちの樹の下でした。

川向ふは、険しい崖になつてゐて、その上に細い道がついて  
ゐますが、道の向ふ側は、又、崖になつてゐて、それが何處  
までも何處までも續いて、高い高いお山になつてゐます。

お山には、眞青な樹が一面に生えてゐて、それにお陽さ  
まが映つて、綺麗な綺麗な緑色に光つてゐます。

静かです。

\*

川向ふのお山から、蟬の聲が、ジイーつこ聞えて來ます。正雄君とお父さんは、一生懸命にうきを見つめてゐます。するこ、正雄君のうきの丁度上のところに、なんだかもやもやつこしたものが映りました。

「おやおや、なんだらう」

こ思つて見てゐますこ、そのもやもやしたものが、向ふの方へもやもや、こつちの方へもやもやこ動いて、やがて、正雄君が毎日毎日見てゐるお母さんのお顔に變りました。

「あらあ、變だぞ。お母さんのお顔だ。……あ、あ、あ、あ、お母さんが笑つたよ」

こ思つてゐるうちに、こんどは、そのもやもやが、おぢいさんのお顔に變りました。そしておばあさんのお顔に、

「お父さん、お父さん、お父さん」

「なんだい？」

「變ですよ。僕のうきの丁度上のところに、お母さんやおぢいさんやおばあさんがゐるんですよ」

「馬鹿な、そんな譯がないぢやないか」

「でも、見てごらんさい、ほら」

お父さんがごらんになるこ、それは、入道雲が川の水に映つて、色々の形に變つて行く、その形が、お母さんのお顔に見えたり、おぢいさんのお顔に見えたり、おばあさんのお顔に見えたりするのでした。

\*

「ほら、正雄。引ひてるぢやないか」

「あ、ほんごうだ」

正雄君が、ひよいつこ、竿をあげますこ、

「なあんだ。餌をこられちやつた」

「ぼんやりしてゐるからさ」

「こんどこそ釣りますよ。お父さん、見てゐて下さいよ」

正雄君は、竿を下してうきを見つめました。

ところが、又、もやもやがやつて來ました。

「あつ、朝顔だ。随分よく咲いてゐるなあ。うむ、今朝僕も早起きの競争をして僕を負かしたのは、あの朝顔だ。

よし、あしたはきつこ僕が勝つよ。うむ、よしよし、水が

飲みたいのか、今飲ましてやるよ。なんだい、そんなに  
はて、しやうがないぢやないか」

「おい、正雄。しやうがないのはお前だよ。ほら、引ひて  
るぢやないか」

見るミ、正雄君のうきが、ビクビク引かれてるます。

「ようし、今度こそ釣るぞ。お父さん、見てゐて下さいよ」  
竿をあげますミ、

「なあんだ、又、餌をもられちやつた」

「しやうがないね、お父さんなんか、もうこんなに釣つ  
たよ。しつかりしなくちや駄目ぢやないか、今晚のおかつ  
が出来ないよ」

「え、大丈夫です。こんごこそ釣りますよ、釣ります  
ごも」

正雄君は、又、竿を下して、うきを見つめました。

ところが、又、もやもやがつて来ました。

「あッ、こんごは、お母さんもおぢいさんもおばあさん  
と一緒に。おやおや、お膳の上には、お茶碗とお皿とお箸  
だけ。あ、さうか、僕がおかつを買はないやうに云つて置

いたからだな。おやおやおや、お父さんだぞ、あ、僕も  
ゐらあ。あ、お魚をもつてるぞ。随分たくさんあるなあ。  
でも、僕のは一疋もゐないや。おや、もう煮えたのかし  
ら。みんな食べたぞ。おいしさうだなあ」

「おい、正雄。なにをさつきから獨り言を云つてゐるん  
だい。うきが動いてるぢやないか」

見るミ、正雄君のうきが、ぐいぐい引つばられてるます。

「ようし、こんごこそ釣らなくちやあ、ひよいッ」

正雄君の餌は、又、さられてりました。

「しやうのない正雄だなあ、一疋も釣れないぢやないか。  
さあ、ぼつぼつ歸らう、だんだん暮れて来たから」

\*

川向ふのお山の縁が、すつかりぼやけて、乳色にくもつ  
て来ました。崖ぶちのお道ももうはつきりは見えません。

正雄君とお父さんは、お家へ歸りました。

その日のお夕飯は、おかつは、お父さんのお釣りになつ  
たお魚で、お話は正雄君のもやもや話。

お母さんもおぢいさんもおばあさんも、大笑ひでした。